

## 審査の結果の要旨

氏名 大橋 麻里子

アマゾンの熱帯林に住む先住民の社会では、森林の「保全」と「先住民」の貧困解決をめざす国際援助機関や行政などによって、コミュニティ主体の保全プロジェクトが実施されてきた。このような開発実践に関連する研究（資源管理論、コモンズ論）はたくさんあるものの、アマゾン事例とする先行研究では、近年の先住民社会の多様な資源利用・複合的な生業を描く試みはなされてこなかった。また、保全や管理の主体となる行政村の設立にともなう先住民社会の変容についての研究蓄積も限られている。本研究は、近年の開発導入によって外部者と新たなかかわりをもつようになった先住民の生活と社会がどのように変容しているのかを、相互行為に着目した民族誌的な記述から明らかにすることを課題としたものである。そのための情報収集は、調査村内では村人宅に住み込みながら合計約10ヶ月間の参与観察・聞き取り調査・実測などをおこなった。また、村外においても合計約21ヶ月間にわたって、他村や都市部に移動・滞在している村人や関連機関（商業伐採企業、森林局、プロジェクト実施機関など）への聞き取り調査、文献収集をおこなった。

本研究の対象地は、ペルーのウカヤリ川流域に位置し、半定住的な生活を送ってきたパノ（Pano）系シピボ（Shipibo）で構成されるドス・デ・マジョ先住民コミュニティ（人口約100人16世帯）である。雨季と乾季とで10m前後水位が変化する土地生産性の高い氾濫原に居住し、農耕・狩猟・採集といった複合的な生業を営んでいる。1984年に行政村となって以降、人々は木材伐採コンセッションの販売を通じて森林から利益を得られるようになった。2006年にコミュニティ主体の木材生産をつうじて持続的な森林管理をめざすプロジェクトが国内研究機構により開始された。

以上の序章に続く1章では、氾濫原における生産活動を明らかにした。シピボは〈低氾濫原〉〈高氾濫原〉〈高地〉という三類型の土地をその特徴に応じて使い分けていた。氾濫原は生産性が高いものの数年に一度の大氾濫による農地喪失のリスクがある。しかし、人びとは人間関係に基づく様々なモノのやり取りなどを通して乗り越えていた。

2章では、食をめぐる分配について検討した。食物分配・食事招待がシピボ社会において重要な役割を果たしていた。外部要因によって各資源の分配のあり方は変容してきたが、豊富な資源の分配や食事招待を通して「他者への配慮」の意味合いを含む「分かちあい」（*aquiquin*）が現在でも重視されていた。

3章では、木材資源をめぐる共同利用について検討した。行政村に認められることで占有的利用権を獲得した木材資源については、行政村としての集合的な意思決定をするようになった。しかし、資源を利用できるメンバーの境界については曖昧であり、その判断基準は村に居住しているかどうか、または共同労働に参加するかどうか、など揺れ動いていた。そして、aquiquinの重視は外部者に対しても求められており、それに通じる態度を示すことが村の資源にアクセスすることを正当化していることが明らかになった。

以上の結果に基づき、終章では、主に小集団による生産を議論してきた資源管理論において、ローカルな社会が外部者を受け入れる条件を考慮する際に分配という消費活動を考慮することの重要性を指摘した。また実践的には、外部者としてアマゾン先住民社会にかかわるとき、村の合意や決定の正当性がどの程度の期間にわたって認められるのかについては長期的な観察にもとづく検討が必要であり、ある一時点の判断を絶対化することには注意が必要であることを指摘した。

以上のように、本研究は「分かちあい」というキー概念に着目することでアマゾン先住民社会への理解を深め、将来の政策形成に示唆的な結論を得ることに成功しており、学術上および政策上の貢献が大きい。よって審査委員一同は、本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。